

招待席

## 萩原 朔太郎

はぎわら さくたろう 詩人 1886.11.1 - 1942.5.11 群馬  
県前橋に生まれる。大正六年(1917)の詩集『月に吠える』  
以降、西欧詩体験と日本への回帰という詩的不条理を憂鬱  
かつ不屈に止揚して日本近代詩の絶頂・深淵を成したと言  
われる。北原白秋に捧げられた掲載詩集は、大正十四年  
(1925)八月刊行、初期作を編んだ前半の「愛憐詩編」およ  
び、後半の「郷土望景詩」から成っている。室生犀星の序、  
萩原恭次郎の跋は著作権を考慮し割愛した。

## 純情小曲集 北原白秋氏に捧ぐ

### 自序

やさしい純情にみちた過去の日を記念するために、このうすい葉っぱのやうな詩集を出すことにした。「愛憐詩篇」の中の詩は、すべて私の少年時代の作であつて、始めて詩といふものをかいたころのなつかしい思ひ出である。この頃の詩風はふしぎに典雅であつて、何となくあやめ香水の匂ひがする。いまの詩壇からみればよほど古風のものであらうが、その頃としては相当に珍らしいすたいるでもあつた。

ともあれこの詩集を世に出すのは、改めてその鑑賞的評価を問ふためではなく、まったく私自身への過去を追憶したいためである。あるひとの来歴に対するのすたるぢやとも言へるだらう。

「郷土望景詩」十篇は、比較的最近の作である。私のながく住んでゐる田舎の小都邑と、その附近の風物を詠じ、あはせて私自身の主観をうたひこんだ。この詩風に文語体を試みたのは、いささか心に激するところがあつて、語調の烈しきを欲したのと、一にはそれが、咏嘆的の純情詩であつたからである。ともあれこの詩篇の内容とスタイルとは、私には分離できない事情である。

「愛憐詩篇」と「郷土望景詩」とは、創作の年代が甚だしく隔たるために、詩

の情操が根本的にちがつてゐる。(したがつてまたその音律もちがつてゐる。)しかしながら共に純情風のものであり、咏嘆的文語調の詩である故に、あはせて一冊の本にまとめた。私の一般的な詩風からみれば、むしろ変り種の詩集であらう。

私の藝術を、とにかくにも理解してゐる人は可成多い。私の人物と生活とを、常に知つてゐる人も多少は居る。けれども藝術と生活とを、両方から見てゐる知己は殆んど居ない。ただ二人の友人だけが、詩と生活の両方から、私に親しく往来してゐた。一人は東京の詩友室生犀星君であり、一人は郷土の詩人萩原恭次郎君である。

この詩集は、詩集である以外に、私の過去の生活記念でもある故に、特に書物の序と跋とを、二人の知友に頼んだのである。

西暦一九二四年春

利根川に近き田舎の小都市にて 著者

## 出版に際して

昨年春、この詩集の稿をまとめてから、まる一年たつた今日、漸く出版する運びになつた。この一年の間に、私は住み慣れた郷土を去つて、東京に移つてきたのである。そこで偶然にもこの詩集が、私の出郷の記念として、意味深く出版されることになつた。

郷土！ いま遠く郷土を望景すれば、万感胸に迫つてくる。かなしき郷土よ。人々は私に情(つれ)なくして、いつも白い眼でにらんでゐた。単に私が無職であり、もしくは変人であるといふ理由をもつて、あはれな詩人を嘲辱し、私の背後(うしろ)から唾(つばき)をかけた。「あすこに白痴(ばか)が歩いて行く。」さう言つて人々が舌を出した。

少年の時から、この長い時日の間、私は環境の中に忍んでゐた。さうして世と人と自然を憎み、いつさいに叛いて行かうとする、卓抜なる超俗思想と、叛逆を好む烈しい思惟とが、いつしか私の心の隅に、鼠のやうに巢を食つていつた。

いかんぞ いかんぞ思惟をかへさん

人の怒のさびしさを、今こそ私は知るのである。さうして故郷の家をのがれ、ひとり都会の陸橋を渡つて行くとき、涙がゆゑ知らず流れてきた。えんえんた

る鉄路の涯へ、汽車が走つて行くのである。

郷土！ 私のなつかしい山河へ、この貧しい望景詩集を贈りたい。

西暦一九二五年夏

東京の郊外にて 著者

## 愛憐詩篇

### 夜汽車

有明のうすらあかりは  
硝子戸に指のあとつめたく  
ほの白みゆく山の端(は)は  
みづがねのごとくにしめやかなれども  
まだ旅びとのねむりさめやらねば  
つかれたる電燈のためいきばかりこちたしや。  
あまたるきにすのにほひも  
そこはかとなきはまきたばこの烟さへ  
夜汽車にてあれたる舌には侘しきを  
いかばかり人妻は身にひきつめて嘆くらむ。  
まだ山科(やましな)は過ぎずや  
空気まらの口金(くちがね)をゆるめて  
そつと息をぬいてみる女ごころ  
ふと二人かなしさに身をすりよせ  
しのめちかき汽車の窓より外(そと)をながむれば  
ところもしらぬ山里に  
さも白く咲きてあたるをだまきの花。

### こころ

こころをばなににたとへん  
こころはあぢさゐの花  
ももいろに咲く日はあれど

うすむらさきの思ひ出ばかりはせんなくて。

こころはまた夕闇の園生(そのふ)のふきあげ  
音なき音のあゆむひびきに  
こころはひとつによりて悲しめども  
かなしめどもあるかひなしや  
ああこのこころをばなににたとへん。

こころは二人の旅びと  
されど道づれのたえて物言ふことなれば  
わがこころはいつもかくさびしきなり。

## 女 よ

うすくれなゐにくちびるはいろどられ  
粉おしろいのほひは襟脚に白くつめたし。  
女よ  
そのごむのごとき乳房をもて  
あまりに強くわが胸を圧するなかれ  
また魚のごときゆびさきもて  
あまりに狡猾にわが背中をばくすぐるなかれ  
女よ  
ああそのかぐはしき吐息もて  
あまりにちかくわが顔をみつむるなかれ  
女よ  
そのたはむれをやめよ  
いつもかくするゆゑに  
女よ 汝はかなし。

## 桜

桜のしたに人あまたつどひ居ぬ  
なにをして遊ぶならむ。  
われも桜の木の下に立ちてみたれども  
わがこころはつめたくして

花びらの散りておつるにも涙こぼるのみ。  
いとほしや  
いま春の日のまひるどき  
あながちに悲しきものをみつめたる我にしもあらぬを。

## 旅 上

ふらんすへ行きたしと思へども  
ふらんすはあまりに遠し  
せめては新しき背広をきて  
きままなる旅にいでてみん。  
汽車が山道をゆくとき  
みづいろの窓によりかかりて  
われひとりうれしきことをおもはむ  
五月の朝のしののめ  
うら若草のもえいづる心まかせに。

## 金 魚

金魚のうろこは赤けれども  
その目のいろのさびしさ。  
さくらの花はさきてほころべども  
かくばかり  
なげきの淵(ふち)に身をなげすてたる私の悲しさ。

## 静 物

静物のこころは怒り  
そのうはべは哀しむ  
この器物(うつは)の白き瞳(め)にうつる  
窓ぎはのみどりはつめたし。

## 涙

ああはや心をもつぱらにし  
われならぬ人をしたひし時は過ぎゆけり  
さはさりながらこの日また心悲しく  
わが涙せきあへぬはいかなる恋にかあるらむ  
つゆばかり人を憂しと思ふにあらねども  
かくありてしきものの上に涙こぼれしをいかにすべき  
ああげに今こそわが身を思ふなれ  
涙は人のためならで  
我のみをいとほしと思ふばかりに嘆くなり。

### 蟻地獄

ありぢごくは蟻をとらへんとて  
おとし穴の底にひそみかくれぬ  
ありぢごくの貪婪(たんらん)の瞳(ひとみ)に  
かげろふはちらりちらりと燃えてあさましや。  
ほろほろと砂のくづれ落つるひびきに  
ありぢごくはおどろきて隠れ家をはしりいづれば  
なにかしらねどうす紅く長きものが走りて居たりき。  
ありぢごくの黒い手脚に  
かんかんと日の照りつける夏の日のまつぴるま  
あるかなきかの虫けらの落す涙は  
草の葉のうへに光りて消えゆけり。  
あとかたもなく消えゆけり。

### 利根川のほとり

きのふまた身を投げんと思ひて  
利根川のほとりをさまよひしが  
水の流れはやくして  
わがなげきせきとむるすべもなければ  
おめおめと生きながらへて  
今日もまた河原に來り石投げてあそびくらしつ。  
きのふけふ

ある甲斐もなきわが身をばかくばかりいとしと思ふうれしさ  
たれかは殺すとするものぞ  
抱きしめて抱きしめてこそ泣くべかりけれ。

## 浜 辺

若ければその瞳(ひとみ)も悲しげに  
ひとりはなれて砂丘を降りてゆく  
傾斜をすべるわが足の指に  
くづれし砂はしんしんと落ちきたる。  
なにゆゑの若さぞや  
この身の影に咲きいつる時無草もうちふるへ  
若き日の嘆きは貝殻もてすくふよしもなし。  
ひるすぎて空はさあをにすみわたり  
海はなみだにしめりたり  
しめりたる浪のうちかへす  
かの遠き渚に光るはなにの魚ならむ。  
若ければひとり浜辺にうち出でて  
音(ね)もたてず洋紙を切りてもてあそぶ  
このやるせなき日のたはむれに  
かもめどり涯なき地平をすぎ行けり。

## 緑 蔭

朝の冷し肉は皿につめたく  
せりいはさかづきのふちにちちと鳴けり  
夏ふかきえにしだの葉影にかくれ  
あづまやの籐椅子(といす)によりて二人なにをかたらむ。  
さんさんとふきあげの水はこぼれちり  
さふらんは追風(つゐふう)にしてにほひなじみぬ。  
よきひとの側(かた)へにありてなにをかたらむ  
すずろにもわれは思ふゑねちやのかあにばるを  
かくもやさしき君がひとみに  
海こえて燕雀のかげもうつらでやは。  
もとより我等のかたらひは

いとうすきびいどろの玉をなづるがごとし  
この白き鋪石(しきいし)をぬらしつつ  
みどり葉のそよげる影をみつめれば  
君やわれや  
さびしくもふたりの涙はながれ出でにけり。

## 再 会

皿にはをどる肉さかな  
春夏すぎて  
きみが手に銀のふおうくはおもからむ。  
ああ秋ふかみ  
なめいしにこほろぎ鳴き  
ええてるは玻璃(はり)をやぶれど  
再会のくちづけかたく凍りて  
ふんすゐはみ空のすみにかすかなり。  
みよあめつちにみづがねながれ  
しめやかに皿はすべりて  
み手にやさしく腕輪はづされしが  
真珠ちりこぼれ  
ともしび風にぬれて  
このにほふ鋪石(しきいし)はしろがねのうれひにめざめむ。

## 地 上

地上にありて  
愛するものの伸長する日なり。  
かの深空にあるも  
しづかに解けてなごみ  
燐光は樹上にかすかなり。  
いま遙かなる傾斜にもたれ  
愛物どもの上にしも  
わが輝やく手を伸べなんとす  
うち見れば低き地上につらなり  
はてしなく耕地ぞひるがへる。

そこはかと愛するものは伸長し  
ばんぶつは一所(いつしよ)にあつまりて  
わが指さすところを凝視せり。  
あはれかかる日のありさまをも  
太陽は高き真空(まそら)にありておだやかに観望す。

## 花 鳥

花鳥(はなとり)の日はきたり  
日はめぐりゆき  
都に木の芽ついばめり。  
わが心のみ光りいで  
しづかに水脈(みを)をかきわけて  
いまぞ岸边に魚を釣る。  
川浪にふかく手をひたし  
そのうるほひをもてしたしめば  
かくもやさしくいだかれて  
少女子(をとめご)どもはあるものか。  
ああうらうらともえいでて  
都にわれのかしまだつ  
遠見にうかぶ花鳥(はなとり)のけしきさへ。

## 初夏の印象

昆虫の血のながれしみ  
ものみな精液をつくすにより  
この地上はあかるくして  
女の白き指よりして  
金貨はわが手にすべり落つ。  
時しも五月のはじめつかた。  
幼樹は街路に泳ぎいで  
ぴよぴよと芽生は萌えづるぞ。  
みよ風景はいみじくながれきたり  
青空にくつきりと浮びあがりて  
ひとびとのかけをしんにあきらかに映像す。

## 洋銀の皿

しげる草むらをたづねつつ  
なにをほしさに呼ばへるわれぞ  
ゆくゆく葉うらにささくれて  
指も真紅にぬれぬれぬ。  
なほもひねもすはしりゆく  
草むらふかく忘れつる  
洋銀の皿をたづね行く。  
わが哀しみにくるめける  
ももいろうすき日のしたに  
白く光りて涙ぐむ  
洋銀の皿をたづねゆく  
草むら深く忘れつる  
洋銀の皿はいづこにありや。

## 月光と海月

月光の中を泳ぎいで  
むらがるくらげを捉へんとす  
手はからだをはなれてのびゆき  
しきりに遠きにさしのべらる  
もぐさにまつはり  
月光の水にひたりて  
わが身は玻璃(はり)のたぐひとなりはてしか  
つめたくして透きとほるもの流れてやまざるに  
たましひは凍(こご)えんとし  
ふかみにしづみ  
溺るごとくなりて祈りあぐ。

かしこにここにむらがり  
さ青にふるへつつ  
くらげは月光のなかを泳ぎいづ。

## 郷土望景詩

### 中学の校庭

われの中学にありたる日は  
艶(なま)めく情熱になやみたり  
いかりて書物をなげすて  
ひとり校庭の草に寝ころび居しが  
なにものの哀傷ぞ  
はるかに青きを飛びさり  
天日(てんじつ)直射して熱く帽子に照りぬ。

### 波宜亭

少年の日は物に感ぜしや  
われは波宜亭(はぎてい)の二階によりて  
かなしき情歡の思ひにしづめり。  
その亭の庭にも草木(さうもく)茂み  
風ふき渡りてばうばうたれども  
かのふるき待たれびとありやなしや。  
いにしへの日には鉛筆もて  
欄干(おばしま)にさへ記せし名なり。

### 二子山附近

われの悔恨は酔えたり  
さびしく蒲公英(たんぽぽ)の茎を嚙まんや。  
ひとり畝道(あぜみち)をあるき  
つかれて野中の丘に坐すれば  
なにごとの眺望かゆいて消えざるなし。  
たちまち遠景を汽車のはしりて  
われの心境は動擾せり。

## 才川町

十二月下旬

空に光つた山脈(やまなみ)  
それに白く雪風  
このごろは道も悪く  
道も雪解けにぬかつてゐる。  
わたしの暗い故郷の都会  
ならべる町家の家並のうへに  
かの火見櫓をのぞめるごとく  
はや松飾りせる軒をこえて  
才川町こえて赤城をみる。  
この北に向へる場末の窓々  
そは黒く煤にとざせよ  
日はや霜にくれて  
荷車巷路に多く通る。

## 小出新道

ここに道路の新開せるは  
直(ちよく)として市街に通ずるならん。  
われこの新道の交路に立てど  
さびしき四方(よも)の地平をきはめず  
暗鬱なる日かな  
天日家並の軒に低くして  
林の雑木まばらに伐られたり。  
いかんぞ いかんぞ思惟をかへさん  
われの叛きて行かざる道に  
新しき樹木みな伐られたり。

## 新前橋駅

野に新しき停車場は建てられたり  
便所の扉(とびら)風にふかれ  
ペンキの匂ひ草いきれの中に強しや。

烈々たる日かな

われこの停車場に來りて口の湯きにたへず  
いづこに氷を喰(は)まむとして売る店を見ず  
ばうばうたる麦の遠きに連なりながれたり。  
いかなればわれの望めるものはあらざるか  
憂愁の曆は酢(す)え  
心はげしき苦痛にたへずして旅に出でんとす。  
ああこの古びたる鞆をさげてよるめけども  
われは瘠犬(やせいぬ)のごとくして憫(あは)れむ人もあらじや。  
いま日は構外の野景に高く  
農夫らの鋤に蒲公英(たんぽぽ)の茎は刈られ倒されたり。  
われひとり寂しき歩廊(ほうむ)の上に立てば  
ああはるかなる所よりして  
かの海のごとく轟ろき 感情の軋(きし)りつつ来るを知れり。

## 大渡橋

ここに長き橋の架したるは  
かのさびしき惣社の村より 直(ちよく)として前橋の町に通ずるならん。  
われここを渡りて荒蕪たる情緒の過ぐるを知れり  
往くものは荷物を積み車に馬を曳きたり  
あわただしき自転車かな  
われこの長き橋を渡るときに  
薄暮の飢ゑたる感情は苦しくせり。

ああ故郷にありてゆかず  
塩のごとくにしみる憂患の痛みをつくせり  
すでに孤独の中に老いんとす  
いかなれば今日の烈しき痛恨の怒りを語らん  
いまわがまづしき書物を破り  
過ぎゆく利根川の水にいつさいのものを捨てんとす。  
われは狼のごとく飢ゑたり  
しきりに欄干(らんかん)にすがりて齒を噛めども  
せんかたなしや、涙のごときもの溢れ出で  
頬(ほ)につたひ流れてやまず

ああ我れはもと卑陋(ひろう)なり。  
往(ゆ)くものは荷物を積みて馬を曳き  
このすべて寒き日の 平野の空は暮れんとす。

### 広瀬川

広瀬川白く流れたり  
時さればみな幻想は消えゆかん。  
われの生涯(らいふ)を釣らんとして  
過去の日川辺に糸をたれしが  
ああかの幸福は遠きにすぎさり  
ちひさき魚は眼(め)にもとまらず。

### 利根の松原

日曜日の昼  
わが愉快なる諧謔(かいぎやく)は草にあふれたり。  
芽はまだ萌えざれども  
少年の情緒は赤く木の間を焚(や)き  
友等みな異性のあたたかき腕をおもへるなり。  
ああこの追憶の古き林にきて  
ひとり蒼天の高きに眺め入らんとす  
いづこそ憂愁ににたるものきて  
ひそかにわれの背中を触れゆく日かな。  
いま風景は秋晩(おそ)くすでに枯れたり  
われは焼石を口にあてて  
しきりにこの熱する 唾(つばき)のごときものをのまんとす。

### 公園の椅子

人気なき公園の椅子にもたれて  
われの思ふことはけふもまた烈しきなり。  
いかなれば故郷(こきやう)のひとのわれに辛(つら)く  
かなしきすももの核(たね)を嚙まむとするぞ。

遠き越後の山に雪の光りて  
麦もまたひとの怒りにふるへをののか。  
われを嘲けりわらふ声は野山にみち  
苦しみの叫びは心臓を破裂せり。  
かくばかり  
つれなきものへの執着をされ。  
ああ生れたる故郷の土(つち)を踏み去れよ。  
われは指にするどく研(と)げるナイフをもち  
葉桜のころ  
さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり。

## 郷土望景詩の後に

### I 前橋公園

前橋公園は、早く室生犀星の詩によりて世に知らる。利根川の河原に望みて、堤防に桜を多く植ゑたり。常には散策する人もなく、さびしき芝生の日だまりに、紙屑など散らばり居るのみ。所々に悲しげなるベンチを据ゑたり。我れ故郷にある時、ふところ手して此所に来り、いつも人気なき椅子にもたれて、鴉の如く坐り居るを常とせり。

### II 大渡橋

大渡橋(おほわたりばし)は前橋の北部、利根川の上流に架したり。鉄橋にして長さ半哩にもわたるべし。前橋より橋を渡りて、群馬郡のさびしき村落に出づ。目をやればその尽くる果を知らず。冬の日空に輝やきて、無限にかなしき橋なり。

### III 新前橋駅

朝、東京を出でて渋川に行く人は、昼の十二時頃、新前橋の駅を過ぐべし。畠の中に建ちて、そのシグナルも風に吹かれ、荒寥たる田舎の小駅なり。

### IV 小出松林

小出の林は前橋の北部、赤城山の遠き麓にあり。我れ少年の時より、学校を厭ひて林を好み、常に一人行きて瞑想に耽りたる所なりしが、今その林皆伐られ、檜、樺、ブナ「=手ヘンに無」の類、むざんに白日の下に倒されたり。新しき道路ここに敷かれ、直として利根川の岸に通ずる如きも、我れその遠き行方を知らず。

## V 波宜亭

波宜亭、萩亭ともいふ。先年まで前橋公園前にありき。庭に秋草茂り、軒傾きて古雅に床しき旗亭なりしが、今はいつこへ行きしか、跡方さへもなし。

## VI 前橋中学

利根川の岸辺に建ちて、その教室の窓々より、浅間の遠き噴煙を望むべし。昔は校庭に夏草茂り、四つ葉(くろばあ)のいちめんが生えたれども、今は野球の練習はげしく、庭みな白く固みて炎天に輝やけり。われの如き怠惰の生徒ら、今も猶そこにありやなしや。